

2012年11月10日

「日本ムラ」の改革を

岡田裕二

私が国会議員の政策担当秘書として、2011年の福島第一原子力発電所事故と、その後の新しい原子力規制の在り方について取り組んでいた2012年3月7日、自民党本部で開催する「原子力規制組織プロジェクトチーム」に、講師として民間原発事故調査委員会の北澤宏一委員長・東大名誉教授にお越しいただいたことがあった。

彼は講演で、福島第一原子力発電所事故の原因について、「安全対策が不十分であったことの問題意識は、関係者が皆共有していたが、『私一人流れに逆らうことを言っても仕方がない』という『空気』が原子力関係者の中に蔓延し、組織が困るかもしれないことは発言せず、自分の任期が終わったらもう関係ない、という『日本社会独特の特性』から惰性が生じ、流されるままに行動して不完全な安全規制につながった」と指摘しておられた。

この「日本社会独特の特性」という言葉は、彼がまとめた民間原発事故調査委員会の報告書にも記載された言葉だが、これほど悲しい表現もないと思う。色々な事象の分析で多用されるこの表現には、「日本人には、絶対にこの習性から逃れられない」という諦めと、「日本人はこうだから、仕方がない」という免罪・贖罪願望が含まれているからだ。しかし、これを改めない限り、日本に明日はない。

かつて原発という「夢のエネルギー」の推進は、自民党のみならず産業界も含めた国是だったはずだ。1969年に連載を開始し、今や国民的な漫画となっている「ドラえもん」の主人公は原子力で動いているという設定だ。この「夢のエネルギー」を促進する流れに逆らい、それを押しとどめるような厳しい規制を課すのは、容易なことではなかったのだろう。しかし、今、日本に必要とされるのは、そうした「空気」に流されない反骨精神だ。

北澤宏一委員長は報告書策定に際し、このようにも語ったと言われる。「もしも『空気を読む』ことが日本社会で不可避であるとすれば、そのような社会は原子力のようなリスクの高い大型で複雑な技術を安全に運営する資格はありません」

これをどう読みとったらいいのだろうか。多くの人にとっては、「『空気を読む』ことが日本社会で不可避である」ということは受け入れざるを得ないだろう。しかし、日本にとって原子力技術も、また不可欠なものである。

「出る杭は打たれる」とは我々日本人にはとても馴染みのある諺だ。誰かが突出し、

判断を下そうとすると、その判断によって不利益を被る人たちが出る。お互いがお互いの利益を差し出し合い、庇い合い生きている利益共同体では、その全体の調和を崩すような決定を、その構成者の一人が下すことなどできないのだ。談合も、贈収賄も、学校のいじめも、全てそう。原子力だけが特異な世界ではなく、日本全体が、こうした「日本ムラ」に浸かっているからこそ、不正の根絶や革新に、かくも労苦が必要とされるのである。

この自民党原子力規制組織プロジェクトチームに、当時落選中の立場ながらも意欲的に参加して下さった土屋正忠・衆議院議員が、ある時プロジェクトチームの会合でこう語ったことがある。

「日本人は責任を取りたがらない人種。だから、皆責任は『お上』が取ってほしいと思っている。今回は保安院も安全委員会も責任を取りたくないから何も決定を下さなかった。だから、何の知見も能力もない菅総理が、責任を取って判断せざるを得なかった」

全く問題の本質を言い当てていると思う。空気を読み合い、責任を取らない。この「日本ムラ」の二大元凶を改めていかない限り、いくら原子力安全・保安院と原子力安全委員会を解体し、新たに「3条委員会」として独立した権限を有する原子力規制委員会を創設したところで、同じ過ちは繰り返されてしまうだろう。私は日本に原子力の技術は必要だと考えているが、もしこの「日本ムラ」の元凶・悪弊が改善されないのであれば、北澤委員長が言うとおりの、日本には原子力の技術を扱う資格など無いのだろう。

「原発事故の際、最終決定権限を持つべきは誰か」という危機管理の議論の中で、しばしばよく言われたのは、「国民の生命と財産に責任を持つのは総理だ」というフレーズだった。このフレーズは、私は不完全だと思う。正しくは、「国民の生命と財産に責任を持つのは総理だけではない。国民全体も責任を持たなければならない」だろう。

政治家は自らの本分に責任を持ち、行政機関と事業者は各々の職務遂行に責任を持ち、国民は自らの安全と公共の福祉のためにできる限りのことを、責任を持って行う。この当たり前のことを一つ一つ文字にし、法律にし、国民性にしていくことで、日本の真の安全、真の自立、そして真の発展があるのではないか。